

艾蕪^{がいぶ}の第三次南行

中 田 喜 勝

Ai Wu's third travel to South-China

Yoshikatsu NAKATA

ま え が き

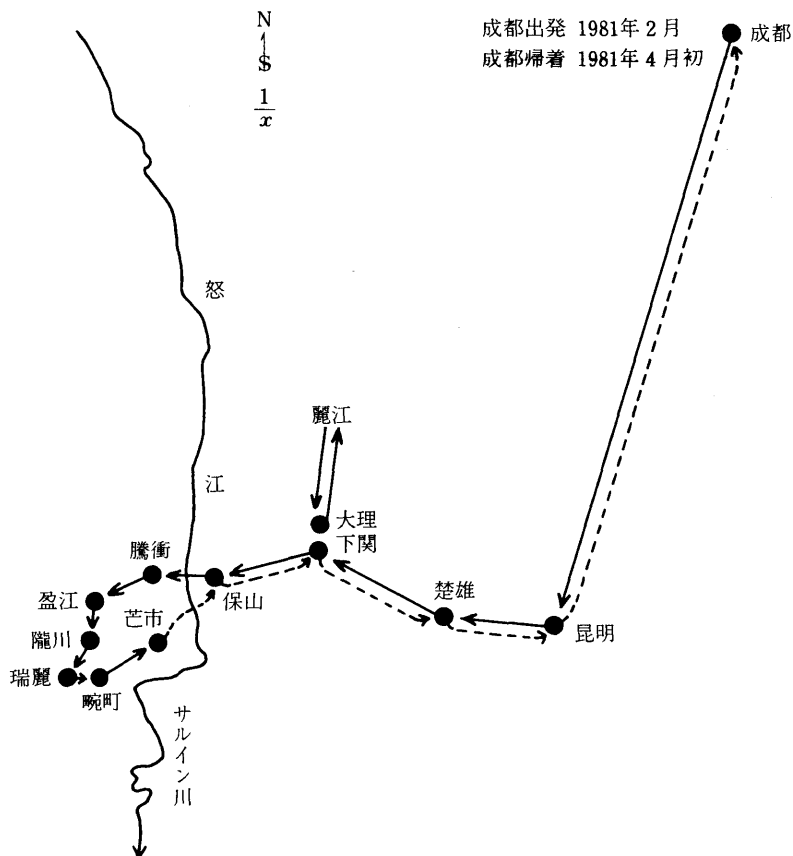
人は思い出の地を訪ねてみたい願望を誰でも持っている。その思い出は各種各様であるが、特に青春時代の思い出の地はその願望が一段と強いようである。

雲南は艾蕪先生だけでなく、筆者の“青春の地”でもある。期間は二年に満たず、実際に雲南に歩を留めたのは数ヶ月に過ぎない。芒市・蜿町の地であった。雲南の風物、人情は今だに忘れ去ることが出来ない。

本文の狙いは、第三者から艾蕪について語ることである。従来は主として艾蕪自身の文章を通じて、艾蕪の人と為りを考えて来た。今回は、雲南の女流散文作家馮永祺の散文を通じて、艾蕪の人と為りについて考えたいのである。彼女の散文集に《竹樓情思》というのがある。1984年10月、四川人民出版社の出版に成るものである。この中に“相識在南行路上”と題する一文がある。艾蕪の第三次南行に同行した時の体験を書いている。先ずこれを紹介し、次に筆者の《昆明紀行》も参考として付け加えることにした。従って目次は：

- ① 艾蕪の第三次南行要図
- ② 馮永祺の《相識在南行路上》
- ③ 筆者の《昆明紀行》

① 艾蕪の第三次南行要図



② 南行の旅路で識り合う (相識在南行路上)

艾蕪先生は三回目の南行の旅で騰衝に五日間滞在された。

“県委”招待所は県城近くの小さな山上に建っていた。招待所の二階の廊下に立つと、騰衝の有名な火山、打鷹山が眼前に在るかのようで、手を少し伸ばしさえすれば、火山層の溶岩結晶と称するものが拾いあげられるようであった。

私は生れて初めて火山の前に立っていたのだが、それは黙して語らず、物静かで優雅な火山であった。神秘的な気分がやはりふと湧いて来るのだった。

艾蕪先生は語られた。一昨年、日本を訪問しましたが、富士山はただ遠くか

ら眺めただけでした。一回目と二回目の南行の旅では、騰衝を通過しましたが一泊しただけで、先を急いでいたので、そのすばらしい眺めを気に留めませんでした。今、火山とこんなに間近く向いあうのは生れて初めてですと。珍らしく興味深いと思われたのだ。

騰衝では大きな山の間近かに宿泊したことだけが珍しい巡り合せではなかった。

空一面に星が輝き、月が見えないある夜、招待所の電燈が突然消えた。招待所の人がローソクを部屋毎に届けてくれた。艾蕪先生の部屋にも豆粒大の灯りが点いた。私たちは自分たちの部屋でローソクの灯りを頼りに読書をしたり、メモを整理したりしていた。

すると、誰かの興奮した話し声が私の部屋まで聞えて来た。艾蕪先生の部屋の来客の声であった。誰だろうか？ 私が艾蕪先生の部屋の入口に立ってみると、先生と来客がローソクの暗い灯りの下で、一冊の書物をめくって看ているところであった。先生は私が来たのを知って、嬉しそうに来客を私に紹介してくださいました。

“この方は騰衝第一中学校の尹文和先生で、お父上が万慧法師とお友だちです。万慧法師の詩集一冊を贈ってくださったのです。”

万慧法師とはビルマ華僑のサンスクリット語学者で、“寺住いはず、人に書物を教えて、清貧な独り暮らしをしていた。”先生はビルマに漂泊して、貧困と病苦に見舞われたが、万慧法師はその見知らぬ重病人を引き留めてくれたのだ。先生はそのことを生涯、肝に銘じておられたのである。法師のお蔭で異国に落ちぶれた先生の若い生命が“浮雲のように消え去ることもなかった”のである。永年、手に入れたいと望んでおられた万慧法師の詩集が騰衝でやっと先生の手に入ったのだ。

尹文和先生は《南行記》の非常に熱心な読者で、もっと多くの人々にこの本を読ませるために、更に一組み買って、騰衝の華僑村と順和公社の図書館に贈呈したのである。

騰衝で過ごした五日間はすばらしくて、忘れ難いものであった。

騰衝には雲南の名花“椿”の原木、“紅花油茶”がある。打鷹山を中心に茂っていて、奇観を呈する火山の群れであった。世界最古のものと謂われる“つつぢ”の樹もある。温泉・沸泉・冷泉で構成された地熱の奇景もある。先生は陰しい山道を二時間半も歩いて、“黃瓜箐峡谷”の深いところに在る“熱水塘”を見物に行かれた。温泉の湧き出る穴が方々にあって、水蒸気が勢よく立昇るの

が見えた。先生は道端に腰を下ろし、皆と一緒に温泉の熱でゆでた卵を分けあって食べられた。また、松葉を敷き詰め地下の蒸気を利用したサウナ風呂にも入浴された。

或る日、私たちは先生のお伴をして、騰衝の“沙埡林場”所属のいくつかの山で人工栽培している椿の原木―“紅花油茶”を觀賞しに行った。

今度の南行の旅では、昆明に到着したその日に“円通公園”で折よく“百花会”が開かれていると聞いて、先生が旅塵も落さず、休息も取らないで高櫻先生と一緒に花の品評会を見物に行かれたことを私は憶えている。見物人の品評会場の投票所で、先生は雲南椿に一票を投ぜられた。“やはり雲南椿が良いよ。”と先生は仰言った。

ところで、艾蕪先生の最も好きな椿の原木を騰衝で見られたことは意外なことであった。“紅花油茶”は実に珍しい花で、椿のように艶麗な色をしている。真紅・桃色と色に濃淡があり、形も様々である。清秀俊逸な単一の花弁であったり、七十あまりの花弁をつけた九重のもあって、それはゆったりとし、ふくよかで気品があった。“酔楊妃”と称する椿は花弁が桃色で、花芯が黄色で美しかった。“牡丹恨”と称する一種もあって、牡丹が看ても嫉妬するといのである。林場の幹部が艾蕪先生を指さして私へ言った。“あの方の書かれた《南行記》を読んだことがあります。”林場の人々が真心こめて私たちを接待してくださるのは、なんと読者という立場もあって、そうされたのだと私にはすぐに分かった。

騰衝県から一番遠い県境にある僦僦族が多く居住している水城生産隊を訪れて見聞したことも珍しい巡り合せと言える。

水城生産隊は国境近くに在って、中国人民武装警察部隊や滇灘辺境検査站から間近かなところにあった。村落は山の斜面に作られていて、背後には鬱蒼とした大森林が控え、神聖な境界碑が森の中に厳然と直立していた。国境線にいて訓練された極度の警戒心からきっと吠えるのであろうが、私たちが先生のお伴をして村へ通じる道路に一步踏みこむと、村中に犬の鳴き声が方々に起こって、警戒すべきだと村人へ告げていた。村落に近づくと、家々の門前には竹が蔭をつくり、緑の影が揺れていた。村落への道が一転すると、眼前二三歩のところにキラキラと光る刀が見えた。頭を頭巾で包み、下にゆったりした膝までしかない短かいズボンをはき、肩から長刀を吊した十名あまりの男が前方の道路に立ったり蹲ったりしていた。まるで“泥人形”の群れのように行く手を塞いでいた。山村の人々は性格が精悍で、見知らぬ人へは警戒して身構えるだ

ろうと私たちは予想していた。しかし、彼らの様子はどうみても奇妙であった。艾蕪先生は“人形”の方へ自ら近づいて行かれた。犬が私たちの前後を走りまわって、しきりに吠えた。熱烈に歓迎しているようでもあり、村への闖入者を咬み殺そうとしているようでもあった。先生が近づくにつれて、“人形”は動いて道をあけた。どの顔にも親しみをこめた眼があるだけで、歓迎の言葉も無く、笑顔も見られなかった。彼らは歓迎のため村が派遣した代表であったのだ。

生産隊長は肩から長刀を吊した中年男であった。生産隊の小学校兼倉庫のある小さな建物に案内して座談会を開いてくれた。彼の紹介ぶりは進行中に実に度々、矛盾と困難に遭遇したのだ。人を感動させる言葉は耳にしなかったが、真心こめて会おうと努力している心情は理解できた。人の心を温める歓迎の言葉こそ耳にしなかったが、僕僕族の淳朴な人情と素朴な接待ぶりを見とどけたのである。

雲南民族学院卒で生産隊の小学校教師をしている僕僕族の娘と私は一緒に居たのだが、彼女が私にそっと告げた。“私はあの方の本を持っています。”“《南行記》でしょう。”と言うと彼女はうなづいた。“読みましたか。”と尋ねると、またうなづいた。その本を持参して、艾蕪先生にサインして貰って記念にしたらと提案したのだが、その教師の家は座談会場から遠くて間に合わなかった。

その小学教師には蔵書が多いはずはないと想像したのだが、多くもない蔵書の中に紛れもなく《南行記》があったのである。電灯も無いこの村で、インキ瓶で作った油灯の下で彼女が《南行記》を読む情景を私は想像してみた。艾蕪先生を喜ばせるためにこのことを必ず教えてあげようと私は心にきめた。

騰衝の夜はすっかり更けて、眼前の打鷹山は星の光の下で、神秘的な淡い青色の光を放っていた。先生は各地の現状を認識し、同時にその土地の歴史も知るために、道中いつも時間を割かれた。“県委”宣伝部の方が《騰衝県志》を贈って下さった。先生が必要だと指定された数冊の《県志》を私が受取ると、糸綴じの書物の中から便箋が一枚ヒラヒラと落ちたので、腰をかかめて拾い上げてみた。それは何と驚いたことに、県の図書館のある七十歳の管理員が先生へ贈呈した旧体詩であった。その長い詩には先生の《南行記》その他の作品へ対する喜びと敬慕の情が心をこめて表現されていた。その中の一句に“神交四十年”とあった。

私は図書館の管理員が書いた詩を先生へ渡した。先生と精神的交りが四十年にもなるこの老読者は“県委”招待所へ先生に会いに来るはずだと私は思った。しかし、私たちが騰衝を離れる時になっても、近くにいるこの人は現われ

なかった。意外なことであつた。車は街の近くの岡をすでに通過し、高い山の峰を通り越してしまつた。先生と精神的交りを四十五年五十年と続けるという仕方でも何時までも先生を敬慕しているこの愛すべき人のことを私は考えつづけていた。

作家を理解する最も良い方法はその作品について、“文はその人の如し”ということを理解すればよいのだ。老いた図書管理員は先生の《南行記新篇》の中でも、作家と精神的交りを続けることをきっと期待しているのだ。作家が人生をかくも愛しており、先生の三回目の南行の旅が以前と全く同じように、生活の中の真・善・美を相変らず懸命に掘り出して表現し、讃美することを知って、彼はきっと喜ぶに違いない。

車は盈江県の大きな山の上を走っていた。先生は道端の樹木と草が一面に繁つた中に隠れている一つの小道を指さして言われた。“最初の南行の旅には、あの山道を歩いたのですよ。長い間、人影一人も見えない時もあり、山中に囀る鳥の鳴き声を道連れにして歩いたものです。”

車が山頂に到着すると、銀色に燦めく盈江が麓の岡の間を流れているのが見えた。先生は車窓から下の方の大きな山を眺めておられたが、私たちにあの山上の小道が茅草地へ通じているのだと告げられた。皆は先生が茅草地のある旅籠で半年間、馬小屋を掃除したりして、飄泊の苦しみをいやという程、嘗められたことを知っていたのである。

その時、《南行記》の読者のある若い労働者の言葉が私の耳もとに聞えて来た。それは楚雄の彝族自治州宣伝部主催のアマチュア文芸作家の座談会での席上であつた。彼は言ったのである。“私は《人生哲学的一課》から飢餓の味がどんなものかが分かりました。《我诅咒你那麽一笑》から人は同情心を当然持つべきだが、その同情はきちんとして力強いものでなければならず、弱気になってあれこれ考えこんではいけないのだと分かりました。”更にまた、《南行記》のその他の作品がそれぞれ彼へ与えた心の陶冶と啓示にまで話が及んだのだつた。私たちは雲南の西部地区で、《南行記》が読者に与えた深い影響を一々記述できないほど数多く見届けたのである。

車は山を下り始めた。強い風が車窓から吹きこんで来た。皆は開いていた窓を期せずして閉めた。その時、私は大理を通つた時、有名な下関の狂風が吹き荒れていた夜、数名の読者が風を衝いて先生に会いに来た時の情景を思い出していた。

下関は大理の白族自治州の首都である。“下関の風”は“上関の花”、“蒼山の

雪”、“洱海の月”と同様に有名である。車が下関の街に入ると、案の定、ゴウゴウという風の音がまるで松風や海鳴りのように聞えていた。幸い、丁度、春で、烈しい春風も冬の北風よりはるかに穏やかであった。とは言っても、別に長い間、下関に住んだわけでもなく、鍛えられたわけでもない外地の人々にとっては、どの季節でも下関の風は怖いものである。艾蕪先生は下関に到着し、その夜は蒼山ホテルの質素な東二階に宿泊されていた。ホテルの前に立並ぶ楊樹が強い風に煽られて大きく揺れていた。この風をまともに体に受けたら、楊樹のように、“ウーン、ウーン”と大声を出して痛いと思うことであろう。私たちは先生の部屋で、翌日、大理県へ行く手筈を先生と相談していた。すると誰かがドアをノックし、ドアがすぐに開けられると、数名の人々がまるで屏風のように入口に突立っているのだ。

“艾蕪先生、私たちはあなたの読者です。”これは身分を証明するのにとてもよい言葉であり、人を非常に感動させる言葉でもあった。特に下関からピューピューと唸り声をあげる強い風に混ってこの言葉が発せられた時には。先生は急いで椅子から立上り、心から招き入れた。“どうぞ、おはいりになって、腰かけて下さい。”

読者たちは次々に入って来た。だが何処に腰掛けるのか。部屋には木製の大きなベッドの外に椅子が三脚あるだけである。それで、先生も含めて全部が立ったままで、椅子に腰掛けようとする者は誰もいなかった。

“いいです。一目、お目にかかりに来たのですから。”

先生は皆と一人一人に握手をされた。皆は先生を一目また一目と見て、繰返し言った。“思いがけないことです。ほんとにびっくりしました。先生がまた雲南に来られるとは。”“艾蕪先生の作品を読んだ上に、作家の本人と下関でお目にかかれるとは。”

なるほど、雲南は山国で遥かな山路だから、行こうと思う人はあまり多くはないのだ。先生は半世紀も隔てた後に、再び南行の旅をなさったのである。下関のこの数名の読者たちは南行の旅の途上に在る著名な作家を確かに見届けたのだ。一目、会うと彼らは嬉しそうに別れを告げた。彼らは言ったのだ。艾蕪先生の時間は大変、貴重だから、長くお邪魔をしてはいけないのだと。

室外は下関の風が断えず叫び声を発していた。先生は我を張って自分自身で読者を階下まで、更に庭まで見送り、何度も“ありがとう皆さん。”と言われた。

読者は自分たちの気に入る作品を作家が書いたことに感謝をし、作家は自分が書いた作品を読者が喜んだことに感謝をする。それは極く普通のことかも知

れない。しかし、作家の方からすれば、先生のようにそれほど心から感謝するだろうか、自分の読者を心から愛することまでするだろうか。

その後、艾蕪先生は南行の旅を続けられて瑞麗(シュエリー)に到着し、中学校のある教師と知り合いになられた。その人は先生と同郷であった。その人が言ったのである。大学卒業後、“到辺疆去”の呼びかけに進んで応えて、滇西(雲南西部)に来て教師となったのは、《南行記》に深い影響を受けたからだ。その人が志を立てて、雲南の辺境で仕事をする決心をしたことに対して、艾蕪先生は敬意を表し、この教師が三回も読んで頁が黄ばんだ《南行記》の扉に“あなたは辺境で永年お仕事をされているので、拙作についてご意見を多く出されることを希望しています。”と書かれた。

この教師は貴重な宝物と見做している《南行記》を捧げ持って、丁寧に言った。“先生の書かれる《南行記新篇》を読んで、新たに鼓舞されることを望んでいます。それが私の意見です。”

読者に対する先生の真心こもった愛情は随時、看ることができる。このような読者への愛は往々にして雲南を愛することと結びつくのである。読者の小李は若い編輯者であり、先生と同郷でもあった。彼女が新たに買った《南行記》一冊を手にして、先生にサインをお願いした時、先生は書物の扉に諄々と諭すように書かれた。“貴女が雲南で仕事することは幸せです。美しい大自然は創作にたずさわる貴女の情熱をたぎらせ、すばらしい文芸作品を創造するでしょう。”

艾蕪先生は雲南の若い女流作家彭鴿子より半世紀あまりも年長である。彼女が読んだばかりの《南行記》を手にして、先生にサインをお願いした時、先生は老眼鏡を掛けて、彼女を励ますことばを書かれた。“鴿子同志、貴女が学習に仕事に努力するよう希望しています。”

南行の旅の途上で、《南行記》と《南行記続篇》の中のどの作品が人物・事物の描写に勝れているのかと私は好んでよく先生にお尋ねしたものである。先生は大多数のものが一寸した生活に基づいて書いたものだと語られた。また何度も私たちに教えて下さった。作者にはその生活があるが、更に想像を逞ましくして、創造された人物の性格をいかに論理的に発展させるべきかよく考えねばならないと語られた。先生は《南行記》の中の《安全師》という小説が人物、事物をよく表現していると言われた。

三回目の南行の旅で、五十年あまり昔、ビルマのラングーンで知り合い、一緒に万慧法師に英語を教わった安全師と艾蕪先生が芒市で会われるとは誰もが

予想もしていないことであった。二人の会見の場面は実に感動的であった。

艾蕪先生が南行して芒市に到着されると、“徳宏州文工団”の小胡がやって来て、陳直棠という老人を知っているかと先生に尋ねた。陳は先生がラングーンに居た時の学友だというのである。先生は考えこんだが陳という学友をどうしても思い出せず、“その人の記憶違いでしょう。”と残念そうに言われた。

その翌日、小胡が異常に興奮して知らせに来了。“艾蕪先生、あの人は別名を安全と言うと言ってますよ。”

小胡が話し終るのも待たず、一瞬、息をのんでいた先生はすぐ喜んで叫ばれた。“何ですって、安全って、どこに、どこに居るんです！”

先生は私たちへ大声で言われた。“その人こそ私の《南行記》のあの《安全師》の安全ですよ。彼の号が陳直棠とは知らなかった。何時、つけた号だったのかなあ。”

小胡は外へ走り出して、先生の方を振り返って言った。“あの人は会いたがっています。とても会いたがっています。今から呼んで来ます。”

陳直棠の若い頃の様子は小説《安全師》の中に描かれているようである。彼は浙江の普陀寺で和尚になり、ビルマへ行って、ラングーンで先生と知り合った。抗戦の時期にはラングーンからの帰国を強要され、それ以来、芒市に留まっていたのだ。今やすでに八十歳であった。

五十年あまり前、すでに著名な作家であった艾蕪先生はそれでも昔の友人が来たと聞いて、門まで急ぎ足で出迎えられた。

“安全！”と先生は彼の昔の法名を親しげに呼んだ。

“湯先生”と陳直棠は声を震わせて叫んだ。

両脚が悪くて杖をついている昔の友人に先生は急いで近づき、手で抱きかかえるようにして助けた。二人は膝をつき合わせて、深夜まで語り合った。先生は夜道を懐中電灯で照らし、小胡と私たち雲南人民出版社の小周を伴なって、陳直棠を家までずっと見送られた。

いよいよ芒市を離れる時が近づいていた。出発の前夜、先生はわざわざ陳直棠に別れを告げに出かけられた。狭くて暗い庶民の平屋建ての中で、陳老先生は新聞の切抜きを取出して先生へ告げた。“この年まであなたにお会いもしなかったが、あなたの消息はよく知っていました。”彼は一枚の切抜きを指さしながら言った。“これは作家訪問団長として大慶へ行った時のでしょう。切り取っていたのです。”

体を鍛え、晩年を幸せに過ごすようにと先生は彼を激励された。陳直棠は先

生の手をしっかりと握りしめ、悲しげに言った。

“八十歳ですよ。多分、もう会えないでしょうね。”

先生は彼の手をぎゅっと握りしめて言われた。“会えますよ、きっと会えますよ。雲南人民出版社が呼んでくれたら、四度目の南行の旅にきっと来ますよ。”

作家が作品中の人物にうまく肉づけするには、その描写対象をよく理解しておくことがぜひ必要である。艾蕪先生は安全法師を理解していて、彼が生活に幻想を多く持ち、勉強好きで、頭が良かったと作品の中で賞讃しているが、一方では、“粘りが不足し、読書を継続する”ことに欠けた点があったとも述べておられる。

芒市を離れて、先生は道中、安全のことに話が及ぶと、その度に残念そうに言われた。“一心にサンスクリット語を学んでいたら、今頃はその道の専門家になっていたのに。”と。

安全の歩いた道程は曲折していた。主観的にまとめると、彼の欠点は先生が五十年前に早くも言い当てていたのである。

艾蕪先生はこの度の南行の旅では県に到着するごとに、新華書店へ行ってみようと皆と約束をされた。先生は書物が大好きで、それは唯一の嗜好でもあった。滇西（雲南西部）のどの新華書店にも《南行記》とその《続篇》とがあった。先生ご自身はシュエリー（瑞麗）県の新華書店で最後まで残っていた二冊を買われた。《南行記》とその《続篇》の読者は雲南西部地区に広がっている。当然、その地区だけではないのだ。

盈江に居た時、カチン族がその民族伝統の“目闇総戈”（目脳節ともいう。農曆1月に、二・三日ひらかれる歌や踊り。）を開いていることが耳に入った。群衆は歌い踊るこの楽しみを通じて社交をひろげるのである。姐冒公社では一万人以上が参加して三日間、開かれた。その日は丁度、三日目であった。場所が国境近くで、附近の住民の出入があり、人々が暴れ出したりすることも考えられ、県委の責任者にとっては艾蕪先生が行かれると、心配の種にもなることであった。先生は群衆の生活の側面を理解したく思って、行ってみる決心をされた。

公路上では行事に参加する馬車が鈴の音をチャリン、チャリンと響かせていた。その鈴は銅で作られていた。車上には盛装したカチン族の女が黒い服の上に銀のアクセサリーをどっさり着け、色とりどりの日傘を翳していた。芳香を放つ白い花を髪に挿したタイ族の女も参加していた。男と女があちこちから銅鑼の音のする場所へ向かって歩いていった。

私たちは先生の後について、車を下り、人の流れに乗って歩いた。前も後も

聴き取れない少数民族の言葉が溢れていたのだが、笑顔で迎えてくれるので、皆はすぐに彼らと仲良しになった。緑色のスカートをはいた色黒なカチン族の娘が中国語を少し話せた。先生が“あなたは何という名前ですか。”と彼女に尋ねると、“マール”と答えた。

“マールって二番目の子どものことでしょう。”と先生が尋ねると、“マールは二番目、マーコオは三番目の子どもです。”とその緑のスカートの娘が答えた。

艾蕪先生は嬉しそうに私たちへ話された。“《収穫》に《マール》という小説を発表しますが、カチン族の二番目の娘のことが書いてあります。私の記憶は間違っていないませんでしたよ。”

歌と踊りがすでに始まっていた。緑衣のマール(瑪露)は快活な子鹿のように、瞬く間に歌舞の人の流れの中に入って行った。彼女の音楽のリズム感は極めてよく、一挙手、一投足のその舞い姿はプロのダンサーにひけをとらなかった。

先生は私たちと一緒に歌舞の人群れの外側に立っていた。後ろには国営商店といろいろな品物をならべた個人の出店とがあった。食べ物や日用品が出揃っている。皆は歌舞を見学したくもあるし、立並ぶ出店を見物したくもあったのである。そこには、少数民族や土地柄がよく分かる品物が並べられていた。先生は先ずかなり高い処に出ている店の方へ歩いて行かれた。その場所は店員が物を売ることができたし、我々が歌舞を見学することもできた。そこは姐冒公社百貨会社の品物を売る出店であった。その出店のそばにはビルマ国境附近に居住する若い人々の群れが西瓜を売っている店があった。私のグループが来たことで、人々は好奇心をもう募らせていた。店の前の数人の若い男女が同行の小周に尋ねた。“誰が来たのかね。”

小周はためらわずにほんとのことを答えた。“艾蕪先生ですよ。”彼はこの名前は口に出しても出さなくても同じことだと思いこんでいたようだ。なぜなら知っている人はいるはずが無いと思ったからである。

“艾蕪？《南行記》の作者の？”と若い男女は強い反応を立ちどころに示した。こんどは小周が不思議に思う番で、あまり確信も無さそうに尋ねた。“皆さん、その本を読んだことがあるんですか。艾蕪先生が誰だか知ってるんですか。”“知ってるよ。”“読んだことがあるよ。”と国境近くの若者たちは異口同音に答えた。その言葉を耳にして、先生は彼らの目の前に歩いて行き、親しげにくつろいで一緒に時間を過ごされた。若者たちが質問した。“こんど二度も南に来られたのですから、また《続篇》をお書きになるのでしょうか。”“書きますよ。”と先生はうなづいて答えられた。“私たちは期待しています。”と若者たちは希望に燃え

た眼差しで先生を眺めた。

南行の旅の道程で、“艾蕪先生、私はあなたの愛読者です。”という言葉は先生はいたる処で耳にされたのだ。

遥かな山村から、人里離れた山の谷間からそして又、二つの国の国境附近の人と各少数民族とが参加する楽しい“目闇総戈”の会場からも真心こもった言葉が伝わって来たのだ。素朴な心の声は先生に慰めと励ましを与えてくれたのである。

《南行記》と《南行記続篇》は先生の生命の一部を形成している。先生は読者に多くのものをすでに与えたのだが、まだ足りないと思われ、更に生命の一部を形成する《南行記新篇》を書かれようとしているのだ。

四回目の南行の旅の時にも、その途上で先生と知り合いになることを期待している読者はやはり多いのだ！。

③

昆 明 紀 行

8月19日午前8時、成都を発車した第289便の列車が昆明に到着したのは翌日20日の午前9時で、1,100軒、一昼夜の旅であった。料金は乗車券18.70元、硬臥の寝台券(中段)が12.20元、合計30.90元であった。日本円では約2,700円になる。

降車の人波の最後尾が地下道から消えかけていたが、ホームには出迎えの人影が無かった。困ったことになったと一瞬、思った。中国の旅は幾度もしたが、このようなことは初めての経験であった。上海、成都、南京そして西安でも何時も出迎えの人が待っていてくれたのである。

改札口を出て、駅前の広場の片隅にしばらく呆然と突立っていたが、それでも出迎えらしい人が来ない。成都で人に依頼して電報を打っていたのに、どうして来てくれないのかと少し不安になった。

降車した人々は両手に重そうな手荷物を持ち、次第に広場から消えて行った。取残された私は速やかに対策を考えねばならぬと思案していると、幸い広場に面した建物に公安局の出張所の看板がさがっているのが目についた。その前に一人の中年男が立っていた。近づいて設備のきちんとしたホテルを紹介してくれと頼むと、彼は昆湖飯店というホテルの名を挙げた。外国人も宿泊しているのかと念を押すと、よく泊っていると答えた。私を中国人と勘違いしたらしく、彼の言によると“比較好”なそのホテルを紹介してくれたのだった。

自転車にリヤカーをくっ付けたような三輪自動車に乗って、昆湖飯店を目指した。運転手に少し高いとは思いながらも五元支払って、昆湖飯店のフロントの前に立った。愛想のよい四十女に宿泊申込書と前金を渡してから、「文联」の馮永祺女史と電話で連絡をとるように頼んだ。彼女は同年輩の別の女服務員に電話を掛けるように命じた。その女は電話番号を電話局に問い合わせるのに数分かかり、やっと連絡を取ってくれた。“すぐ飯店に行くから待っているように”という女史の伝言を私に告げた。

私の部屋は五階に在った。合部屋ですでに外国人の泊り客が五名いるとのことである。どんな外国人か少し不安でもあった。以前、成都の錦江賓館では二人の合部屋であった。南京大学のドイツ語教師で、ドイツでは高校の英語教師であった。短パンに大きなリュック、峨嵋山に登るのだと張切る三十歳代の人で、気易く話しを交わせる人であった。

私はショルダーバッグを右肩にかけ、両手に布製の旅行バッグを下げて、フロントから5米ほど離れた階段の方へ歩いて行った。途中にエレベーターがあったので、乗ろうとしたが、なんと動いていないのだ。壁にエレベーターの“服務時間表”が貼ってある。その時は十時近くで、“勤務時間”外であったわけだ。西安の某“飯荘”に宿泊した時のことがふと頭をよぎった。その中国人専用の旅館はエレベーターはあったが終日、動いていなかった。部屋は八名の合部屋で、旅客は華僑が多かった。しかし、一泊、三元とべら棒に安い料金であった。

二階へ通じる階段の踊り場で、両手のバッグを床に下ろして、しばらく息を入れた。気を取り直して二階の廊下まで登ると、壁に寄せて長椅子があり、そこに若い女服務員が二人腰掛けておしゃべりをしている。これ幸いと荷物運びを手伝ってくれと頼むと、“すみません。私たちの仕事ではありません。”と言って澄ました顔で、またおしゃべりをするのである。“私は外賓です。”と喉もとまで出かけた言葉をぐっと呑みこんで我慢した。

踊り場や廊下で休憩しながら、やっと五階の自分の部屋に辿り着いた。ドアを開けると、上半身裸体の外人の姿が目に入った。ベッドに寝そべったり、机に向かってペンを走らせている者もいる。脚を伸ばし壁に寄りかかって、地図を展げている者もいる。外人特有の動物的な体臭が私の鼻を衝いた。部屋中にその臭いが立籠めていて、気分が悪くなりそうだ。臭いに敏感な私の鼻は早くも拒絶反応を起こし始めた。窓があいていても臭いがするのである。

同宿の外人は医師一名、医学生四名のドイツ人とイギリス人であった。旅行バッグ二個をベッドの下に押し込み、ショルダーバッグを枕元に置いて、私は

ベッドに仰向けになった。隣のベッドに腰掛けていたドイツ人が英語を私に分かると知って、矢継早に英語で尋ねて来た。“何日間宿泊するのか。”“観光で来たのか。”“日本の何処から来たのか。”等々。机に向かって絵葉書にせっせと書きこんでいたドイツ人の医師が日本に二週間ほど旅行したことがあると言った。日本の印象を尋ねると、“物価が高くて、どうも。でも日本人自身は親切でしたよ。”と微笑しながら答えてくれた。彼の手許には書き終えた絵葉書が数枚キッチンと重ねられていた。

十時半ごろ、馮女史が電報を右手に握りしめて訪ねて来た。艾蕪先生宅で見た写真とそっくりの女性であった。丸顔に太い眼、中肉中背で、ズボンをはいている。彼女の方から口を開いた。“20日に出発したのか、20日に到着するのかこの電文でははっきりしませんよ。それに私の宿舎は“文联”から離れているので、先刻、受取ったばかりです。”と少し高ぶった口調で言い、そして出迎えに間に合わなかったことを詫びた。部屋をさっと見渡して、彼女は言った。“こんな部屋は駄目ですよ。もっと良い部屋を準備します。二時に又、来ますから。”と言ってすぐに帰って行った。公安局の職員が“比較好”(かなりよい)と紹介してくれた昆湖飯店ではあったが、私はここを選んだことを後悔していた。第一にバスが部屋に無いこと、第二に外人のあの体臭である。

朝食を摂っていなかったので、腹が空いて来た。人の好きそうなイギリス人の医学生に、“食堂は何処に在るのか。”と尋ねると、彼は肩をすくめ、両手を広げて言った。“駄目ですよ。外で食べた方がいいですよ。ここの食堂は混雑してゆっくり食事できません。”そして“ホテルの近くの食堂を僕は利用しているのです。”と付言した。

十二時も過ぎて、空腹を我慢できなくなり、二階の食堂へ独り降りて行った。食堂の隅に長方形に仕切ったホーロー引きの容器が並び、おかずが四種類ほど残り少なになっている。各自が好きなおかずを選んで、注文する仕組みになっていた。“青椒肉絲”と“もやしの炒め”を注文した。残念ながら“肉絲面”は無かったので、例の硬くてポロポロの飯を食べる破目になった。

外人は混雑すると言っていたのに、お客は私の外に一名いるだけで、ガランとしていた。壁には大きな横断幕が引いてあって、何かの会合がこの食堂であるらしかった。私がまだ食事中なのに女の服務員が近くで床をしきりに掃いている。五六分後に、食堂の責任者らしい男がテーブルに近づいて来て、“早く食べて出て行くように。”とぶっきらぼうに言った。私を中国人と思い込んでの発言のように思われた。“僕は日本人ですよ！”と言いたかったが、じっと我慢した。

三分の一ほどおかずを食べ残こしたまますぐに食堂を出た。

部屋にもどると、外人の姿は一人も見えなかった。昼食のため外出したようである。部屋にずっと居るとあまり感じなくなる外人の体臭も、廊下から一步部屋に入ると部屋中にこもっているのが分かる。嫌な感じであった。

開け放たれた窓から外を眺めると、六階建赤煉瓦のビルがずっと続きその先の方に山の稜線が長々と横たわっていた。写真のシャッターを二枚切った。山が見えなかったら撮らなかったかも知れない。私は山を意識していた。艾蕪先生が青年時代に雲南の険しい山々を徒歩で越えて、昆明の街に辿り着いたことが私の頭の中に在った。それらの山々を資料としてフィルムに収めておきたかったのだ。山以外にも、先生が起居した紅十字病院の跡やよく遊びに行った翠湖なども撮る予定であった。私が昆明まで来たのは先生に関する資料収集が主な目的であった。

二時かきりに馮女史がご主人を同道して訪ねて来た。ご主人はあまり背が高くなく、小肥りで、眼鏡をかけていた。物腰の柔かい人である。服は中山服だが布地は薄茶で、明らかに“幹部”の服装であった。フロントで前金と休憩料金の差額十元あまりを受取り、道路へ出た。乗用車が待っていて、促されるままに車上の人となった。車は“ニッサン”である。“これは文联の車ですか”と馮女史に尋ねると、“いいえ、主人の役所の車です。主人は車が出せるのです。”と答えた。私はホットした気分になっていた。ガタガタ震動する小型三輪自動車と“ニッサン”とでは、その快適さは天地の差である。

馮女史とは初対面の緊張が全くなかった。共に艾蕪先生を尊敬しているという共通の感情から生じる一種の親近感があった。日本を離れる数ヶ月前に、艾蕪先生から郵送された一冊の本を受取った。それは馮女史の散文集“竹樓情話”という書名の本であった。その本から先生へ対する彼女の敬慕の情がすぐに読みとれた。彼女は散文作家としてかなり有名な女性であることを私は知ったのである。

車窓から見る昆明の街並みはゆったりした感じであった。広い道路と高い街路樹があった。上海のような人の混雑も無い。人の歩き方までがゆっくりしているようにさえ見える。

車は“翠湖賓館”というホテルの玄関に横づけになった。ドアボーイが立っている。フロントで宿泊手続きを執った。馮女史のご主人王氏が値段の交渉をしてくださる。観光旅行ではなくて研究の為の旅行だということで、一泊四十二元、合客はしないということになった。昆明第一の外人専用のホテルの料金

としては安く泊れたことになる。多分、普通の外人客だったら60元から100元はとられるところだ。北京飯店や南京の金陵賓館などは100元以下で泊ることは先ず難しい。

二階の奥まった静かな部屋であった。早くバスに入りたい衝動を抑えて、早速、馮女史と打合せを始めた。写真に収めたい場所への案内及び艾蕪先生の知人の紹介を依頼した。幸い先生の知人が一名生存していることが判明したので、面会の手筈をとって戴くように願う。又、23日の広州への飛行機の切符を購入するようお願いすると、ご夫妻でしばらく相談されていたが、結局、引受けて下さった。本来なら入手困難だが、何とかルートがあるようにお二人の会話から受取られた。日本では考えられないことが中国にはよくあるのだ。

打合せが終りご夫妻が帰られたので、早速バスの栓をひねる。湯気を立てて綺麗なお湯が勢よく流れ出た。両足を揃えてピンと伸ばし、両肩を湯の中に沈めっていると、やっと気分が落ち着いて来た。お湯好きの私はバスに何回も入ることにしている。起床すると、すぐバスへ、外出から帰るとすぐバスへ、就寝前にもそうするのである。足先の排水口を足の裏で塞ぐとお湯が湯舟に溢れそうになる。そんな要領まで会得していた。

お湯から上がって、ベッドに腰掛け、テレビを見る。今年は抗日戦勝四十周年に当たるので、番組にもそれと関係したものが組み込まれている。例えば、老舎の「四世同堂」が連続して放映されていた。目前の映像もそれであった。上海、南京と「四世同堂」を見ることになったが、今、又、昆明でもこれと相対することとなったのである。その後、広州でも上海でも見る機会があった。

「四世同堂」は1930年代の北京の中国人家庭を題材とした小説で、愛国者と「漢奸」とが同じ家庭に同居しているその両者の対立を克明に描いてある。映像には当時の北京の風物が比較的良好に表現されていた。

夕食を摂りに食堂へ行く。入口には案内の美女がいて、テーブルまで案内してくれた。天井が高く明るい食堂には大勢の外国人が食卓に着いていて、外国の食堂に居るような錯覚に陥る。一見して、日本人のグループと分かる人たちもつつましく、物静かに食事をしている。二、三ヶ所に散在しているだけで、合計十数名もいるだろうか。広い食堂を女服務員がキビキビした動作で、立働いている。皆、一米六十前後の長身で、一応美女と言える顔立ちをしている。綺麗な脚線には何時も感心させられる。一流のホテルになると、美女を揃え、十分な訓練が施してあって気持ちがよい。昆湖飯店の服務員と比べると雲泥の差がある。噂によると、南京の金陵賓館も美女を集めていて、そのせいで

もないだろうが、料金が高いという。

ウエイトレスが微笑を浮かべながら近づいて来て注文をとる。黙っていたら外人向けのセット料理七元のが出されることが分かった。七元の夕食は贅沢だから、一・五元のうどんを頼む。円に換算すれば 700 円にもならないのだから日本でなら極く普通の夕食だが、中国人の収入や物価を基準にすると、贅沢な食事となる。折角の旅行だから、甘い物を値段のことは考えないで食べたらよさそうだが、どうも“贅沢は敵だ！”という生活習慣が身についてしまっているらしい。

食事を済ませ席を立てて二三歩の時、“中田先生”と呼びながら誰かが背後から近づいて来た。振り返えると、何と驚いたことに張君がニコニコしている。正に奇遇であった。張君は上海交通大学の日本語教師で、福井、金沢両大学の学生数名を案内して旅をしているのであった。前日、石林のホテルに一泊し、石林見物をして、今、このホテルに泊っているのだと言う。昆明に二泊してから、飛行機で広州へ出発することになっていた。張君が二年前の年の暮れに長崎に来た時には、「一力」で歓迎会を開き、国際交流会館での長大留学生の忘年会にも案内してあげたことがある。広い中国で知人に逢うとは実に奇遇というべきだろう。

翌朝(8月21)、朝食を済ませると、すぐにカメラを持って、翠湖へ向かった。その湖は翠湖賓館 (Green Lake Hotel) のすぐ近くで、歩いて二分とかならなかった。入口で“二分”の料金を支払って湖の公園に入る。舗装された幅五米ほどの道路が湖の中を繋いでいるらしかった。路上では定年退職した男女の老人がしきりに太極拳をしている。皆、神妙な顔で、手足を静かに動かしている。道路の両側は木立と藪があり、その切れ間から湖水が見える。歩いていると珍らしいものが目についた。木の枝に箱型や丸型の鳥籠がぶらさげであるのだ。皆、同じ鳥である。何の鳥か知らないが雀を引延ばした感じの鳥であった。岸辺で鳥籠を三分の一ほど水中に浸けて、水浴びをさせているのも珍らしい眺めである。四人組の時代にはとても見られそうもない情景であった。それだけ、日常生活にも余裕が出て来ているのであろう。五六箱もあったほほえましい水浴びの鳥籠を愛用のアサヒ・ペンタックスに収めなかったのが今だに残念である。しかし、このカメラは珍らしい標語を見事にとらえた。赤地に白く文字を染め抜いた横断幕が古風な亭の極彩色の柱に張り渡されていた。その文句は“講究清潔衛生是中華民族的傳統美德！”とある。勿論、簡体字で書かれている。中国の標語はその時代相を端的に表わしていて、社会研究のよい材料を提供し

てくれる。標語と反対の社会現象があると考えられるからだ。この標語から判断すると、清潔と衛生の面でまだ欠けるところがあるのだとすぐに分かる。外人が宿泊するホテルの衛生・清潔はかなり徹底して保持されている。しかし、一步街頭や郊外へ出るとそうはいかないのである。

翠湖は艾蕪先生が青年時代よく遊びに来た場所で、湖面に映る星影に触発されて作詩したこともある。その詩に次のようなものがある。

湖畔をさまよへば 夜空のキラメク星も
水面の淋しき星影も 涙ぐむ我に光りそそぐ
ふと流れ星の一閃すれば 水のは我へと突き上がり
空のは我へと馳せ下る あゝ吾れ二つの星を捧げ
燦然といざ飛翔せん！

当時を回想して、「四川文学」(四川人民出版社・1980・1)に先生は次のように書かれている。

1927年夏、家を離れて漂泊し、雲南の省都に到着した。昆明の紅十字社で雑役をしたが、初めはなお哲学の研究をしようと張切っていた。その後、書物を多く買う資金も無かったし、直面している退屈な生活の為に、高尚な研究をすることは容易ではなかったので放棄せざるを得ず、また文学の道に後戻りした。同時に、投稿する関係で、幾人かの文学研究の青年と接触した。例えば、「雲波社」の人たちで、そのため新詩を更に努力して作った。その内容といえ一つは抒情的なもので、悲哀を吐露し、一つは唯美的な、私自身の心を酔わせるものであった。ここに記憶しているものを一首書き出してみよう。

と述べられて上記の詩が紹介されており、更に言葉が継がれて次のように書かれている。

自分は他人に仕えるつまらぬ仕事であるから、どうして高くなり得ようか。ただ“燦然と飛翔せん！”と幻想して暫時自己満足させたいに過ぎないのだ。当時は、文学内容の傾向が疑いも無く「創造社」の影響を受けていた。と。

多情多感な青年(23歳)艾蕪が翠湖の湖畔を悲哀の情を胸にして逍遙する姿を私は想像しながら、歩き続けた。そして、数枚、写真を撮った。

部屋に戻って、暫らく休息していると、ドアをノックする音がした。腕時計に目をやると丁度、九時、約束通り馮女史が来たのだ。彼女は翠湖の写真を撮ったかと質問して、撮ったと答えると、ではすぐ出発しましょうと言う。私たち二人は雲南「文联」の車に乗って、出発した。車は市街地区を離れ、広い畑の中の並木道を北へ向かって走った。よく晴れた日であった。馮女史は少し風

邪気味である。風邪を無理して私と同行されたのだ。彼女は周泳先先生を午後二時にホテルの私の部屋に案内して来る手筈をしていると告げた。周先生は艾蕪先生の昆明時代の友人であった。先生の若い頃を知っている生証人が健在だと知って、私は期待に胸をふくらませた。車は三十分もすると東西に連なる山の麓に到着した。私はこの山を越えて来た艾蕪先生の姿を空想してみた。疲れ切って跣で山を降りて来る先生の姿を想った。山を仰ぎながら、鋼鉄のように強くて固い先生の意志を想った。連山は夏の日射しの中で、緑に輝いていた。その何処かを突破して先生は昆明の街に辿り着いたのだ。「人生哲学の一課」という先生の出世作の冒頭には次のように記されている。

“昆明というこの街はうっすらと黄ばんだ夕陽がたちこめていた。連山に圍繞された盆地に伏し、悲しげに微笑しているようであった。

遠い山の峰から下りて来た私は小さな包みを右の小脇に抱えて、淡黄の靄が立ちこめた西へ通じる街の通りに、ぼんやりと立止まっていた。その時はまさしく1925年の秋——残酷な異郷の秋であった。”と。

この連山と向かい合っている私は次第に胸の高鳴りを覚えた。第三者からは、何の変わりばえもしない山々にしか見えないだろう。しかし、私にはその山々が強く迫って来るのだ。それは名所旧蹟から受ける感動以上の異質な作用があった。人と対象の間に何か重要な要素がなければ、媒体が無ければ、感動という精神活動は生じないのである。私の場合、人間の“貴重な強固な意志”がその媒体となっていたのである。

馮女史は先生が下山した点と線とを連山の表面に明確に指示することはできなかった。六十年以前のことから已むを得ない。道路の様子も当然変わっているのだ。勢い道路から撮影できる山が選ばれた。稜線は円みを帯びて、険しい山ではなかったが、その後方にもずっと山々が続いているのだ。

シャッターを切ろうと身構えていると、“車が通っていますよ。”と馮女史が口を出した。車も無く、人影もない山道の方がよいと思われたようである。車はジープのような軍用車で、二輛が前後して走っていたのである。思い切ってそのままシャッターを切り、馮女史の方を向いて言った。“かえって、昔と今の対照が出て面白いですよ。”彼女はそれもそうだというように微笑で応じた。この外、道路の入らない山を二箇所撮った。

ホテルに帰り、入浴と昼食を済ませて、二時になるのを待っていた。テレビは小中学校教師へ対する教育指導の番組みで、理科の実験が放映されている。生徒を実際に使ったモデル授業の様子が映し出されている。中国も教育の重要

さを認識しているようだ。“四化”を成功させるには人材が必要だ。それにしても教育の空白を生んだ“文革”の十年間は誠に惜しい時間であった。青少年の中に見られる粗暴な言動は“四講五美”の運動を展開しても、急に効果が挙がるものではないらしい。

ノックの音がした。私は勢よく椅子から立上って、ドアを開けた。目の前に長身を杖に托した周泳先生の笑顔があった。二歩室内に踏みこまれた周先生は開口一番、“艾蕪の研究者と会えてとても嬉しいです。”と満面に笑みを浮かべた。私たち二人は壁に寄せた小さなテーブルを挟んで、隣合せに椅子についた。馮女史は前のベッドに腰を掛けた。私はすぐにまた立上って、テレビのスイッチを切った。周先生は自己紹介を始められた。それによると、「雲波社」で知り合ったこと、当時、艾蕪は英語の勉強もよくしていたことなど話はなかなか尽きなかった。驚いたことに先生の兄上、周曾祐は1919年に長崎医科大学を卒業後、産婦人科医として大学に留まり、1930年に帰国したというのである。帰国後は江南衛生局長となったことがあったが、1975年(昭50)に世を去ったというのである。その三人の子どもも皆、日本で出生したという。実に不思議な縁であった。大正八年から昭和五年まで長崎に居られたことになる。

周先生は七十四歳で、丁度、十歳私より年上であった。少し心臓の調子が悪いので、毎日、服薬しているとのことであった。それでもお顔には艶があって、持病があるとは思われなかった。大きい耳に筋の通った鼻。長顔の美男であった。先生は調子を高めて言った。“ビルマ目指して昆明から出発した時、私たち三人は見送って行ったのですよ。”三人とは王秉心、陸万美、周泳先で、周先生だけが生き残っておられたのだ。私は艾蕪先生が出発された時のことを知りたいと思った。“別れの最後の言葉は何だったのでしょうか。”と尋ねると、周先生は当時を回想するように、少ししんみりした表情で答えられた。“靴が破れても、跣になってでも、ビルマへ行くんだ！”と言ったのです。”この言葉に私は深く感動した。やはり艾蕪先生は強い意志を青年の時から持っていたのだ。“艾蕪は小さな包みを背負っていました。王秉心が餞別として20元を与えました。”と周先生は付言した。そして手提げの中から表装した巻物を取り出された。それは艾蕪先生が第三次の南行の時、昆明に立寄られ、周先生へ贈られた肉筆の詩であった。その詩は私にも見覚えがあった。《南行記新篇》(雲南人民出版社・1983)の序文に代えた“南行雜感”の中にある詩であった。

山を盤り嶺を越えて怒江に下れば
枝に繋かる花は艶にして 木瓜香ばし

昔時 煙瘴にして 人過ぎり難きに

今や 田園 風光好し

この詩が“偶成”と題されていたことを、その巻物から私は初めて知った。詩中の怒江という江は下流はサルイン河となってビルマ領を南へと流れて行く。怒江の名を目にし耳にすると、私は懐旧の情を覚える。あの碧い流れを高い山上から実際に看下ろしたことがあるからである。

周先生が紅十字社跡を案内して下さることになった。馮女史は私の部屋に独り残り、迎えに来たご主人王先生と私と周先生の三人が車に乗りこんだ。目的の地点まで二分とかからなかったのだが、私には待遠しい時間であった。六十年も経過しているので、恐らく何も残っていないだろう。果して場所が分かるだろうかと半ばその資料収集としての撮影を諦めていた。しかし、周泳先という老紳士が現われて案内して下さることになったのである。老紳士と言えば、周先生は暨南大学の文学部教授の経歴があった。

紅十定社に執着するのは外にも大きな理由があった。私が最初に翻訳した先生の短篇小説“左手で敬礼する兵士”の舞台が紅十字社であったからである。この小説の書き出しは次の通りである。

“「敬礼！」

顔をあげてみると、よごれた軍服を着た負傷兵が一人、正面の机のところ
で私に直立不動の姿勢で敬礼していた。すると、そばの別の患者——花柳病
に罹っている芸者がクスリと笑い、さっと白い絹のハンケチを口に当てた。
彼が左手を耳もとに挙げて敬礼したからである。”

周先生は車から下り、杖を軽くついて静かに歩いた。しかし、よぼよぼの老人ではない。腰も背中もしゃんとしている。長身でスマートである。一米七十二厘の私と背たけが殆んど変らない。服も中山服ではなくて、ズボンこそはいているが、旧時代の資産家が着る絹地の黒い上衣であった。青年時代を回想する一老紳士と尊敬する人の故地を求める一日本人とが二人して静かに歩いているのである。夏の太陽が頭上に輝いていた。

「あそこです。」と指差された方を視ると、二本の門柱とそれに続く塀があった。門柱も塀も上塗りが剥げて中の煉瓦が露出している。中は空地になっているのが分かる。早速、立止まって写真を撮る。距離は無限大である。更に近づいて撮る。シャッターを切る指先に感動の震えが伝わるのを恐れた。幅五米ほどの門柱の間を通り抜けて空地に立った。二百平方メートルほどの広さで、予想していたより狭い。子どもたちの遊び場にでもなっているのか、雑草はあまり茂っ

ていない。殆んど平坦な地面であつた。空地の奥に小さな古い平屋があつた。“あの家も昔のままですか。”“そうです。あそこで艾蕪は起居していたのです。”その家は無人の廢屋であるのが一目で分かる。六十年後の今まで残っているのが不思議であつた。その家も写真に収めたのは当然である。歸りに門柱の前で周先生の記念写真を撮った。先生は歩きながらぼつりと洩らされた。“三年後には私はいないでしょう。”“先生そんなことは仰言らないで下さい。まだまだ長生きして下さい。”私は力んでそう言った。死期を予測し、それを他人に告げるとは、私にはまだ出来そうにもないことであつた。

ホテルの部屋に帰ると、馮女史は「文联」に寄稿された原稿に目を通していた。寸暇も無駄にできない多忙なお仕事ぶりである。それから彼女は周先生を車で自宅へお見送りすることになっていた。多忙な時間を割いて私のために大変協力して下さいるのである。彼女やご主人の協力にはやはりその背後に艾蕪先生の配慮があつたのだ。

艾蕪先生の私へ対する用意周到な配慮が7月8日付、馮女史宛の書簡にもよく表われている。その書簡は次の通りである。

永祺同志：

您好！

關於編選的雲南風情小說，打算送拙作兩篇，這由你們決定就好。我自己喜歡的，讀者不一定喜歡。既然來信徵求意見，我暫時選三篇，請您在三篇中選兩篇，比較好。我提出三篇是：1、野牛寨2、姐哈寨3、辺寨人家的歷史。

中田喜勝先生是還寄一本文稿，題名《艾蕪一人と作品》，(日文)要我作序，我已作的，將于今天寄去。他是專門研究中国古代文学的，在長崎大学教唐詩。今年64歲，明年即退休。(日本男教師65歲退休)從82年起，每年暑假都來成都，今年来信說，八月將來成都。他在長崎大学的《信天翁》(短篇小說集的书名)内，發表一篇有關雲南的小說《雲南物語》一篇，表明他很喜愛雲南的山川河谷以及各民族的風俗習慣。他開始研究中国現代文学，是參考香港的一些文学伝記(如中国作家六百人小伝)，写的一本小冊子《艾蕪覚え書》(A note on "Ai Wu")，就写成我是1908年生。我看了之后，才去信較正。他治学精細，写了八本有關我的作品，把三次的南行，都用図線画出。中国評論家很少這樣作品。不多談了。

此致

敬礼！

艾蕪

1985年7月8日于成都

この書簡は一種の紹介状である。私が昆明で馮女史と会うための準備工作である。私は前もって、今度は昆明へも足を伸ばすことを先生へ知らせておいたのであった。馮女史がわざわざ持参して私に見せ、私がコピーをお願いしたのである。

8月23日(金)、昆明発広州行きの0210便の飛行機は定刻から一時間あまり後れて、10時半に飛び立った。昆明飛行場の隅には小型邀撃戦闘機が十数機、一列横隊に並んでいた。今や、印度から援蔣物資を運んだあの米機の機影は無い。昆明の飛行場には中国の飛行機だけだ。外国のあの軍用機は姿を消していたのである。

上空から雲南の連山が見えるかと期待していたが、雲海の連続でがっかりした。しかし、所期の目的を達した満足感が私の胸裡には充満していたのである。

1985年10月5日于樟東書屋記
(冉順華来日を目前にして)

(昭和60年10月11日受理)